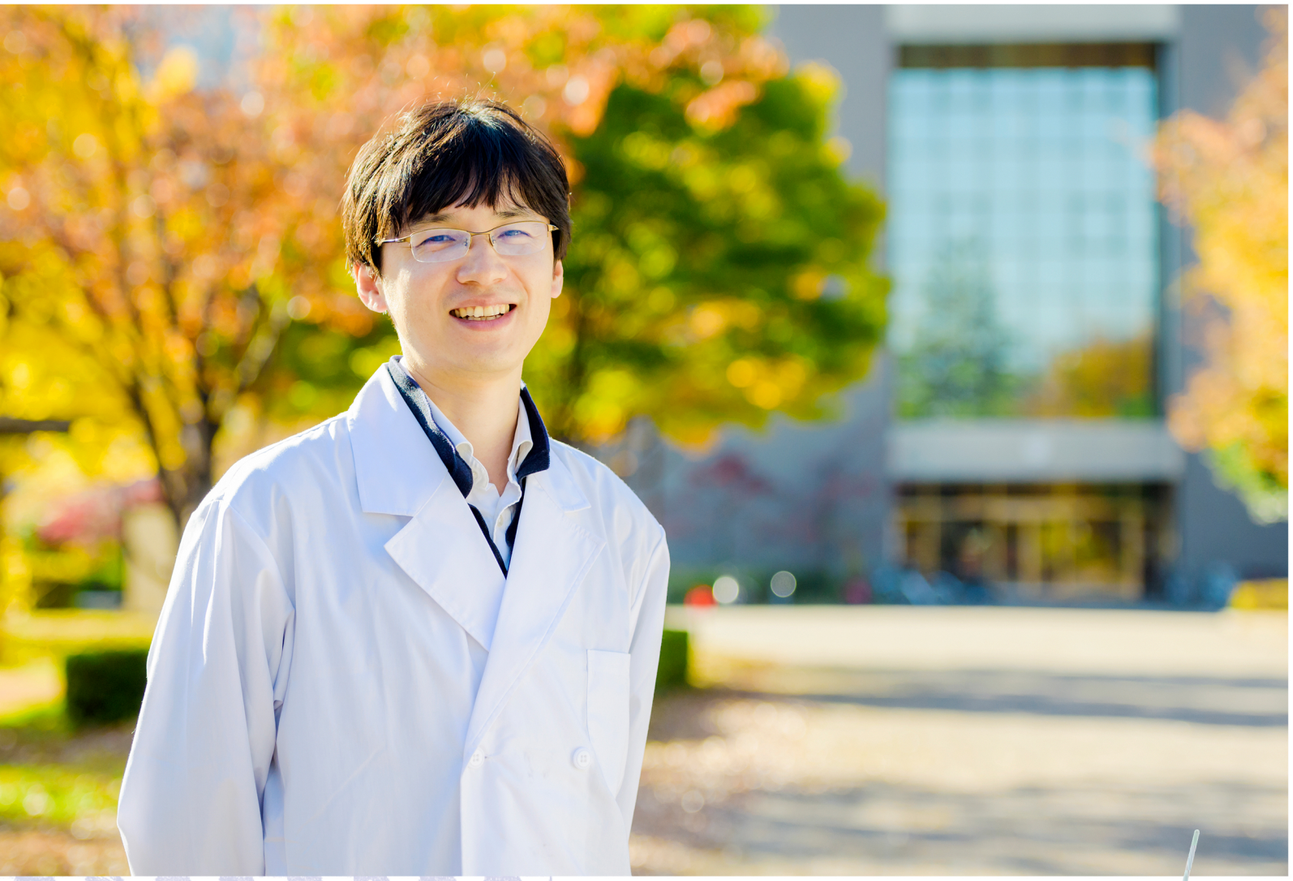
サバティカル・リーブで体験した フランス人の生き方、男女のあり方。日本はまだまだです。



伊藤 冬樹 Fuyuki Ito

学術研究院准教授（教育学系）
（教育学部 学校教育教員養成課程 理科教育コース 准教授）

長野県大町市生まれ。信州大学教育学部、工学部、東北大学大学院理学研究科化学専攻修了。博士（理学）。研究分野は機能物性化学、物理化学。現在の研究課題は、分子集合体・複合体の光化学、光機能性分子の励起状態ダイナミクス。2015 年、第 15 回光化学協会奨励賞受賞。

学生へのメッセージ

よく女子の研究者は厳しいといわれますが、うちの研究室は女性率が高いんです。現場レベルでは女子だからレベルが低いということは全くありません。理系のイメージがオタクっぽいとか、女子は文系みたいな固定観念がいけないんじゃないでしょうか。男性女性に限らず、大切なことは、好きなことをとことんやる、ということです。実験は時間がかかります。時に、失敗の積み重ねになる。でも、結果というのは自然が決めることであって、研究者はその条件をコントロールしているにすぎないんです。その果てしないトライ＆エラーの中から、ある時、何かが生まれるんです。そこがおもしろい。

興味のあることをとことん続けていくことの喜びを、女性研究者を目指すみなさんには、子どもたちに伝えていってほしいですね。

Ecole Normale Supérieure de Cachan（カシャン高等師範学校）の中谷圭太郎教授、Rémi Métivier 博士とのホームパー ティー（Rémi 宅にて）

エッフェル塔を背景に家族写真

父の日のおくりもの

Time Schedule

06:40　起床
07:30　子どもを学校に送り出して朝食
09:00　英語の勉強を１～２時間
　　出勤
10:00　研究室
–
–
–
20:00　帰宅　家族と夕食
–
–
24:00　入浴
–
02:00　就寝

最初の興味が今も研究テーマ

私は教員になろうと信州大学教育学部に入ったんですが、ある先生に出会って「あ、こんな世界があるんだ」と初めて研究の世界を知り、そこから人生が狂いだしました（笑）。

その頃やっていたのは植物の色の研究。アントシアニンという色素を調べていたんですが、いろいろな条件で色が変わってくる。どんな条件で色が変わってくるのか、ということに興味があった。それが今も私のテーマになっています。

その後、修士は信大工学部で、ドクターは東北大学で取得。その後、大阪大学で10ヵ月ポスドクをやり、九州大学工学部に。信大を出てからは糸の切れた風船のように日本各地を回らせていただきました（笑）。

結婚は東北大学のドクター最後の３月にしました。九州で１人目の子どもが生まれ、信州大学に来て２人目が誕生。その子どもたちもいま、９歳と６歳になりました。妻は、行く先々で仕事を見つけて、何かしら働きつづけてきました。今も好きな仕事をしています。仕事をするのはお金を稼ぐというだけでなく、社会との接点を持っていたいという気持ちからだと思います。

フランスの父親は子育ても自然にこなす

昨年、サバティカル・リーブ（研究休暇）をいただいて、家族全員でフランスに半年間滞在してきました。そのときの経験は貴重でした。フランスでは、小学校５年生以下は一人で歩いてはいけないので、娘と毎朝片道 10 分歩き、バス停に送っていました。子どもと一緒に歩くなんて日本ではありえないことでした。

また、フランスでは家族の事情が最優先で、子どもに何かあって帰らなければならないというときにも、仲間が「わかった」とすぐに理解してくれる。暗黙の了解があるんです。そういうところに文化の違いを感じましたね。

子育てや家族を優先しているからといって、仕事がおろそかになっているかというとそうじゃない。彼ら、本当にタフなんです。人生全部を楽しもうという気持ちをもって生きている。そういうところ、日本はまだまだだな、と思いました。

その時に友人になった彼は、奥さんも研究者で、育児については父親がメインでやっている。それもごく当たり前に。すごいですよね。

なかなか、すぐに彼らと同じようにはできませんが、妻の自由時間のために子どもをみているとか、自分なりに努力をしています。

Focus!

大阪市立大学杉本キャンパスで開催された 2015 年光化学討論会で、「第 15 回光化学協会奨励賞」を受賞しました。この賞は、光化学の研究において顕著な業績をあげた 38 歳以下に授与される賞で、受賞題目は「協同的蛍光変調挙動を示す分子をプローブとした分子集合系の光化学」。今後ますます研究が活発になっていきそうです。

インタビュー：平成27年11月